第1回やまと言葉を美しくの折の筆者

〈東音〉5周年にちなんで

創　設　の　頃

福　田　靖　子

昨年の3月号をひもといてみましたら，最初に私の拙文が提載されていました。年度の終りともなると，その一ヶ年の終りにほっと胸をなで下す一方，来年度こそガンバラナクッチャという新たな心構えが湧いてきて，一文をしたためのでしょうか。

さて，今回は〈東音〉創立当時の想い出を二，三書かせていただきましょう。

冷たい床の上で……

ある暑い夏の日のことでした。私は，三人の子供の育児に追われて（私事になって恐縮ですが）自分を見つめる時間，そうですその頃は，新聞を見る暇さえありませんでした。何しろ，三年間に三人の子供が，次々に生れて来たのですから。

そんな時，洋間の床の上に，上敷も敷かず，ごろっと横になって，冷たい木の感触を肌にあて，暑さをしのいでいたのです。

その頃，ほんの余暇をさいて，近所の子供たち二，三人にピアノを教えていたのですが，そのむなしさを考えていたのです。教えるむなしさ，それはどこから来るのか。

その時，ハッと気付いたのです。日本人でありながら，日本人の子供のための教育，日本人の作品による教育がなされていないからではないかと。その頃，私は桐朋の音楽教室で使用していた青い表紙の「あたらしいピアノのおけいこ」を，ピアノ導入本として使っていました。確にこの本は，読譜という面から見た場合，優れた教則本と思われましたが，日本人の作品による独創的な曲がはいっていないことに気付いたのです。

それから，日本人の作品による演奏会のいかに少いことか，また，私自身の学生々活を振りかえってみて，日本人の作品を学んだのは，木下保先生から，声楽曲を御指導いただいただけで，器楽曲では一曲も演奏したことがなかったことなど思い出したのでした。

第1回やまと言葉を美しく終了後の歓談の一時

日本人の作品を日本人が演奏せずして，どこの国の人が演奏してくれましょうか。この考えに捉えられた時，私は，行動を起したのでした。

やまと言葉を美しく

邦人作品の振興などという大それたことを考えついたのは，よいのですが，その大目標を達成するにはどうしたらよいのか，なぜ邦人作品は演奏されないか，などいろいろと考える内に，邦人作品の中にも優れたものが沢山あることをそしてそれらを演奏する方法即ち，楽曲の紹介と演奏法を広めることが，先決であることに気付いたのです。

その目的達成には公開レッスンという形式が一番適しているのではないかと考えるに至ったのでした。

この考えを最初にお伝えしたのは，作曲家であり，私の恩師である**柏木俊夫**先生だったと記憶しております。

そして，**木下保**先生。

代々木上原の静かなたたずまいに，木下先生をお訪ねした時，木下先生がやさしい眼なざしで，こうおっしゃったのを覚えております。

「邦人作品をやらなくてはいけない，ということは誰でも感じているでしょう。だけど，邦人作品に対する評価がまだ定っていないこともあって，邦人作品を演奏しても，経済的に結びつかないですよ」

また，

「私は，やまとことばを美しくうたうことに，生涯をかけたいと思っています」

日本楽壇に本格的なドイツリードを紹介され，オペラにも数多くの場をふんでいらっしゃる木下先生のお言葉なればこそ，このお言葉から私は啓示を受けたのです。

第一回やまと言葉を美しくの反響は，すごいものでNHKから録音機持参の取材が来られたり新聞に取り上げていただいたりしたのでした。それ以後，いろいろな団体や，方々の地域で，日本語の発声，発音，演奏法などの講習会が開かれるようになり，私が最初意図したところの，初期の目的は達成せられたのではないかと思っております。

「やまと言葉を美しく」は，ここちょっとお休みをいただいておりますが，また新たな企画で，木下保先生をおわずらわせしたいと考えております。

研究会運営のことなど

学生時代，卒業後も，およそ，音楽会だの研究会だの一つの会を催したり，またそのお手伝いすらしたことのない一主婦であった私ですから，会を催すまでの手順などというものを知るはずもありませんでした。

それが「今度，こんなことしたいと考えているのよ」と特に意味を持ってお話したつもりでもなかった私の言葉を，ちゃんと取り上げて，道をつけてくださったのが，当時，河合楽器池袋支店の店長代理をされていた**富田勝彦**さんなのです。

ショパン協会の事務局長であり，かつての東京音楽交響楽団の名マネージャーとして，楽団にその名を知られる**西塚俊一**氏に，お引合せくださったのです。

音楽会を催すについての心構え，苦労，そして手順，いわゆる実務面を，西塚氏に学ぶことができたということは，本当に幸福(しあわせ)なことでした。

鎌田糸吉という筆名を持たれる詩人でもある氏は，熱血漢で，その叱声は私などふるえてしまうほどです。

もし私が一つの事柄を常に両面から見ようと心構けているとしたら，それは，西塚氏のお陰だと信じています。

森敏孝氏による歌唱指導

初めて招待状というものを発送する時のことです。「招待状は，どこどこに出せばよろしいでしょうか」とお尋ねしました。私は「こことこと，あそことここ」というお答えを期待していたのです。

それが，西塚氏は「招待状を出すにも，いろいろな目的と考え方があります。…… 会場をどうしても一杯にしたいと考える時には，どこそこに……枚位お出しする時もあります。それからイタリアオペラなどの時は，なるべく出さないようにするでしょう。……」(当時イタリアオ

—家庭音楽会—

◇東音カルテット　童謡曲集「めだかの学校」　茶木　滋作詞　中田　喜直作曲

1　友人連弾　I霞　春江（中1）　II渡辺陽子（中1）　春の小川変奏曲　中田　喜直作曲

2　親子連弾　高橋和裕（幼）　高橋寿美子（母）　さくら　さくら　日本古謡　ひらいた　ひらいた　わらべうた

◇電子オルガン演奏

3　友人合奏　大谷　達也（小4）　高井　葉子（小3）　萩野　裕二（小4）　飯田　尚（小2）　正木　孝彦（小4）　金　英蘭（小2）　夜　汽　車　スケーターワルツ　ワルトトイフェル作曲

◇東音カルテット演奏　童謡曲集「あひるの行列」　小林　純一作詞　中田　喜直作曲

4　親子連弾　武藤　芳美（幼）　武藤　喜子（母）　ピアノ連弾曲ハ長調　ディアベリ作曲

5　六手連弾　I斉藤　章子（小2）　II小山　香（小1）　III越野さおり（小3）　月　の　夜　ジルヘル作曲　ポ　レ　ロ　ストリボーグ作曲

◇電子オルガン演奏

6　親子連弾　木島桂子（中1）　木島美子　ハンガリア舞曲1番　ブラームス作曲

7　親子演奏　萩野昭三（父，バリトン）　萩野仁志（小2，伴奏）　ほこをおさめて　時雨　音羽作詞　中山　晋平作曲　なれこそわがいこい　シューベルト作曲

8　家族合奏　荒川定男（父）　荒川順子（母）　荒川圭史（幼）　荒川和調（小5）　さくらさくら　日本古謡　かぞえうた　日本古謡　茶いろの小びん　アメリカ民謡

◇東音カルテット演奏　童謡曲集「夜の空」　野田しげみ作詞　中田　喜直作曲

—音楽鑑賞会—

1　みんなでうたいましょう　指導　森　敏孝　テノール独唱　森　敏孝　ピアノ伴奏　水谷百合子

・静かな湖畔
・ばらが咲いた　浜口庫之助作詞　作曲
・からたちの花　北原　白秋作曲
・鐘が鳴ります　山田　耕筰作曲

2　みんなで手をたたきましょう——マリンバと共に——　マリンバ独奏　安倍　圭子　ピアノ伴奏　水谷百合子

・ディズフィンガー　コンフレー作曲
・フラッパレート　グレア作曲
・ガレリア湖　イスラエル民謡
・出　船　杉山長谷夫作曲
・火祭の踊り　ファリア作曲

3　オペラを鑑賞しましょう　日本民話オペラ「河童譚」　松本　重真作詞　石桁真礼生作曲

お花坊	ソプラノ	大町ますみ
おっ母さん	アルト	大貫　紀子
与　作	テノール	山形　忠顕
カッパ河太郎	バリトン	吉江　忠男
地　唄	ソプラノ	三上　輝子
	アルト	新倉　郁子
	テノール	北沢　肇
	バス	知念　昌光
	ピアノ伴奏 I	中井　素子
	II	渡辺　宏子

司会　太田平八郎　電子オルガン　後藤徳夫

オペレッタ「河童譚」

ペラが話題になっていました）など。

という具合に，私の質問に対して，大低二通りの考え方をお話くださるのが常でしたから，私はものごとには必ず，表と裏があるのだということを知りました。

くらしの中によい音楽を

7ヶ月にも及ぶ準備期間の後に，第一回やまと言葉を美しくを迎えたのが，1967年1月12日，まだ松の気分もとれないお正月のことです。

それから2週間後の1月28日に，開催したのが「くらしの中によい音楽を」でした。

これは，『クラシック音楽を私たちの生活の中に定着させよう』という願いがこめられていまして，〈東音〉創設に，力を出し合った仲間たちによって，開催されました。

その時のプログラムは，家庭音楽会と，音楽鑑賞会，に分れていて，鑑賞会の方は**森敏孝**さん，**安倍圭子**さん**大町ますみ**さん，**大貫紀子**さん，**山形忠顕**さん，**吉江忠男**さん，水谷達夫先生のお嬢さんの**水谷百合子**さんなど現役で活躍していらっしゃる方々による出演で豪華プログラムです。

しかも，入場無料でやったのですから，今思い出しても不思議でならないのです。

小さなオペラとはいえ，「河童譚」は，舞台装置も作り，照明もちゃんとして，練習も何回も何回もして，でき上ったものです。

出演してくださった仲間たちの，これから新しい研究会を作るのだという，情熱があったればこそ，こんなすばらしい音楽会ができたのでしょう。

この時の反省は，有料にすべきだったということでした。

「入場無料というから，たいしたことないだろうと思ってきたら，すばらしい会でびっくりしてしまったモー」というのが，観に来てくださった方の大方の御意見で，出演者の方々も，「たとえ100円でも有料にすべきだった」という意見でした。

戦前から見ますと，比べものにならないほど，ピアノ人口が増えているといいますのに，家庭での音楽の占る割合は，あるのか無いのかわからない状態ではないでしょうか。

先頃，日フィル（日本フィルハーモニー交響楽団）の危機のうわさを聞かれるにつけても，もっと**くらしの中によい音楽を**と叫びたい気持です。

〈東音〉ピアノゼミナール　第一回のとき。

声楽曲においては，歌詞が必ずついているということもあって，邦人作品としては比較的演奏されていると思われますが，器楽曲となると誠に少いのではないでしょうか。

そこで，ピアノ教材にもっと邦人作品を取り入れて欲しいと願って，生れたのが〈東音〉ピアノゼミナールでした。第一回は，作曲家であり，ピアニストでもある，**三宅榛名**先生をお迎えして，「子供のピアノ指導法について」お話やら，ピアノ演奏をしていただきました。

会場は，当時の私の自宅，グランドピアノのある狭い部屋に，25脚ばかりの椅子を並べて，何人の方が御参加くださるだろうかと胸をドキドキして，お待ちしていたのを思い出します。

会員は音楽の友に広告を出し，呼びかけを致しました。その時，1人300円の会費を頂載したと思いますが集ったお金が全部で1,800円，即ち，6人の方が集ってくださったというわけです。あとは，私の弟子とか知人に無理やり来てもらって，会の雰囲気を盛り上げたのでしたけれど，皆さんでお菓子を食べ，本当に楽しい会でした。

カワイ楽譜の**伊藤賢三**氏が，お祝いに来て下さったのですが，「こりゃ狭い」とびっくりされておられました。

この時からの会員に，ドイツで勉学中の**杉谷昭子**さん，日本音楽舞踊会議でも活躍しておられる**加地美代子**さん等がおられます。

経済的なこと

木下保先生の「邦人作品をやってもお金にならないから，する人が少いのだよ」というお言葉，森敏孝さんが研究生の方々のために，しばらく無料で御指導に来てくださっていた時の事「二期会の研究生は，将来演奏家としてお金がはいってくるあてがあるから，熱心に勉強するけれど，〈東音〉の研究生は……」と，おっしゃった言葉など，それが何を意味するか，わからない程の経済音痴であった私です。

上記の第一回目の〈東音〉ピアノゼミナールが，赤字だったということも，5年たった今，やっと感づくほどで，毎回毎回の研究会の経済的なことなど，ろくに心を

三宅榛名氏

使わず来てしまいました。「くらしの中によい音楽を」の時も確か，20万円位かかったと思いました。それから邦人作品の研究会ならば，必ず10万単位の赤字がでてしまうのです。

実務面の御指導をしてくださった西塚氏によく「経済的に続かなければ，どんなによいことだって続かないのだよと」叱声を受けたものですが，その意味すらわからず今日まで来てしまいました。

それは，講師として御指導くださった先生方が，みな採算ぬきで御協力してくださったこと，それから，私のそばで働いて下さる方が，皆，経済的な不満をもらさなかったこと，そして私には印税という，ささやかながら他に収入があって，それを全部〈東音〉につぎ込め得たこと（即ち夫と名のつく人から食べさせてもらえたので）そして家賃や会場費その他，多くの人々の目に見えない援助があったればこそ，今日まで続いて来たのだと思います。

しかし，働く人にとってみれば，ボーナスだって人並みに欲しいのにきまっています。また，尊い時間をさい御指導下さる先生方だって，充分とまでいかなくても，それ相応の報いがあってよい筈です。

安倍圭子氏と水谷百合子氏

それに私の個人的財産だって，いつまで続くかわかりません

この研究団体の運営が，会員相互の力によって支えられる時，本当の意味での存在価値があるのだと思います。

人は自分のために価値ありと思うものに，惜しみなくお金を支払うのだということをようやく知り得たように思います。ですから，これから経済的に一本立ちができるか否かは，参加する人々にとって価値あるものであるかないかのバロメーターになるのではないかと思います。

即ち〈東音〉の本当の出発は，これからだといえるでしょう。そして，会員，参加者の方々の経済負担によって支えられない時は，その存在価値を失ったと考えるべきではないでしょうか。

皆さまからのお便りを切にお待ち致します。